

押してけ押してけ

- 一九 押してけく三段目 力の無い者残念だ
- 二〇 押してけくだるまんぢゆう 力のない者だーめだ
- 二一 押してけく善光寺や丸焼けだ 丸焼け善光寺や押しかけだ
- 二二 押しくら饅頭ヨイショくく 押し出せく真中へ 泣く者弱虫ヨイショくく
- 二三 いたけりや出てけ いたけりや出てけ

一なげ二なげ

- 二四 一なげ二なげ三なげよなげいつやのむすこさんなういでやつかねころらでとんでお

- さらひなされ ひとなげふたなげみいつのよ
- ひとたちふたたちみいたちよたいつやの (以下前句に同じ)
- ひとねぢふたねぢみいねぢいつやの (同前)
- ひとわたりふたわたりみいわたりいつやの (同前)
- ひとかつくりふたかつくりみいかつくりいつやの (同前)
- ひとまへふたまへみいまへいつやの (同前)
- ひとよこふたよこみいよこいつやの (同前)
- ひとなげふたたちみいなげよたちいつやの (同前)

月か闇か

- 二五 「月か闇か」

一なげ二なげ、月か闇か

「月夜の晩にとんで歩け」
「闇」
「闇夜の晩にこつそりと」

拳

- 二六 チャ〜ク (福島男)
- 二七 チヨイ〜チ (福島女)
- 二八 多いが勝よ
- 二九 少いが勝よ (又は負よ)
- 三〇 石ぬかし (石なし)
- 三一 鉄ぬかし (鉄なし)
- 三三 紙ぬかし (紙なし)

- 二三 みんな出し
- 二四 チャンケンポ 多いが勝よ インケンポ
- 二五 ちよこ豆ほい
- 二六 東京見物負けるが勝よ
- 二七 ちんらのえ あいこまいこせ せつせつせ (神坂)
- 二八 チャンケンポ チツチツク アイコセ (把之澤)
- 二九 チャンケン 爺と婆と どてんのほい (把之澤)
- 三〇 爺と婆と どてんのほい ほいのほい〜 (末川)
- 三一 いんけんぼ ほのぼ〜
- 三二 チツチクチ あいこせー ちたばたどてんのほい (西野)
- 三三 みんな出せ みんなかくせ
- 三四 チャンケン じやが芋さつま芋 雷線香にぼた餅やほい お皿に團子に箸のせほい

(讀書)

一三五 セツセツセ 青山圖書館の赤い鳥三つ三つ白い鳥三つ三つそこへ書生さんがおつぽ
こぼんのほい おつぽこぼんのほい (黒澤)

誓約

- 一三六 嘘言つた人は千萬兩よこせ川の水をけつかう飲んでしまへ
- 一三七 嘘言ふと針の山へいかせる 閻魔様に舌をぬかれる
- 一三八 嘘言やこの息を見つげに行け
- 一三九 嘘言やこの穴こぐれ
- 一四〇 嘘いや今おれのはいた唾をなめろ
- 一四一 嘘言やこの穴米一俵しよつて傘さして通れ
- 一四二 嘘いつた人はこゝへはいた唾を死んでからのんでしまへ
- 一四三 嘘いつた者は針の山へいかせる

- 一四四 嘘言つた者は八幡地獄へぼつたりしよ
- 一四五 嘘言つた人は日本中の家を皆のんでしまへ
- 一四六 嘘言つた者はげんこつ三つくれるぞよ
- 一四七 嘘こくと爪齧る
- 一四八 人にくれてとれば爪ぬける
- 一四九 指切りかまきり嘘言ふ者は 天から地獄へぼつとりしよ 秤にかけて十匁 お皿に
もつて骨ばかり
- 一五〇 指切りこ切り嘘言ふ者は 天から下までぼつとりしよ つる かめ
- 一五一 指切り間切り 松一本切つた
- 一五二 指切りかま切り嘘言ふ者は天から地獄へぼつとりしよ 隣のおば様指切つて死んだ
ぞよ 天に無いもの千よこせ 地に無いもの萬よこせ
- 一五三 指切りかまきり嘘いふものは地獄の釜へおちるぞよ 鉈一提鎌一提
- 一五四 地獄極楽閻魔様の前でほめられた

決定

- 一五 ずい／＼すつころばしごま味噌ずい ちやつぽに追はれてとつびしやん まはたら
どん／＼しよ俵の鼠は米食つてちゆう／＼／＼／＼
- 一六 かつかいかくれんぼうにしゆうれんぼうにお鏡山の狐のとら／＼用心棒にねえちや
んまつちやんいやほい
- 一七 ちゆう／＼鼠の棚さがし 棚から落ちて踏み越えておまるに追はれてさるまの子さ
るまの子
- 一八 一人二人三人三平の子よつてねむつて橋の下のくそさればー (把之澤)
- 一九 屁は言ひ出しのもと

数取り

- 一〇 ひいふうみだるまだのだちんくるまちんのちん
- 一一 南瓜に芽が出て花咲いてすつぽこぼんのぼん
- 一二 ひいふうみふんだるま 夜も晝も赤頭巾かぶり通せ
- 一三 一一と三四の二の五三一四の二の四の二の五
- 一四 一ちよ二ちよほいよ 二ちよ二ちよほいよ 三ちよ二ちよほいよ 四ちよ二ちよほ
いよ 五ちよ二ちよほいよ 六ちよ二ちよほいよ
- 一五 一じく二三三しよの椎茸牛蒡の麦飯七くさやきな九九んでな
- 一六 時計屋のおばさん今何時一時二時三時四時五時六時七時八時九時十時
- 一七 一月二月三月櫻柳の下で化粧してとうよ
- 一八 一二三目の子よつてたかつてくそかき棒

- 一六 御岳小岳駒ヶ岳そこらへ生えるはまぐそだけ
- 一七 種蒔いて土かぶせて芽が出る
- 一七 種蒔いて二日目に芽が出て棒さした
- 一七 ひいふやみいよやいのむやなゝやはこゝとう
- 一七 手首手のひらまんじよう喜太郎背長てんほこしよう
- 一七 ちゆうくたこかい
- 一七 お姫様の針箱
- 一六 一々こんなでもないに三べた野郎め四でもねえこと五たごたこくな六でもねえ七
面鳥野郎め八つつけられて九やしがつて十んま野郎

言ひぐさ

呼びかけ詞

- 一七 煙々あつち行け 錢と金はこつち来い
- 一六 煙々あつちいけ 京の町廣いに鍵になつてまつていけ
- 一六 お天道様く（お土まゐるから）お手紙あげるで濃い陽をおくれ
- 一六 おれのかげになるものはお茶一斤とるぞ
- 一六 おんの日蔭になる者は天地の山へ連れてつてあれくさこれくさかつといつつけぎの
様に焼き殺す
- 一六 どうくくねんぼう お釋迦の水をまつことかやせ
- 一六 てるく坊主てる坊主 あした天氣にしておくれ

- 一八四 あつちの山かぎれ こつちの山あたれ
- 一八五 烏々烏の風呂屋へ火がついた ちやつと行つて水かけろ
- 一八六 烏々勘三郎 われのすやに火がついた ちやつと行つてぶつきやせ
- 一八七 烏々廻れ 廻らにや羽よこせ 羽がなけりや身をよこせ 身がなけりや死んぢまへ
- 一八八 烏々勘三郎 親の恩を忘れるな
- 一八九 カア／＼烏 後になり先になれ 先になりあとになれ
- 一九〇 烏々森見てとまれ
- 一九一 烏々あとの烏先になあれ
- 一九二 螢來い乳くれる 山伏來い宿かせる あつちの水は苦いぞ こつちの水は甘いぞ
- 一九三 螢來い乳くれる 田圃の稻の水くれる あつちの水は苦いぞ こつちの水は甘いぞ
- 一九四 耳から水出れ 河原の小石
- 一九五 にご／＼すめよ
- 一九六 濁水 静めと

- 一九七 枕々うつれ この針渡つて山椒の木にうつれ
- 一九八 蔦の苔／＼今出にやもう出んな
- 一九九 眼のごみ ぢつさとばゞさとおれ目んなけ こまされとは もつて來てかき出せ (奈川)
- 二〇〇 あーとのもんにあーぶした
- 二〇一 さぶやなさあぶ
- 二〇二 きはなしやなきんまつ
- 二〇三 鐵瓶／＼そつこぬけ そつこぬけたらひつくりかへろ
- 二〇四 鍋々そこぬけ そつこぬけたらかへろ

擬聲語

二〇五 ホーホー (鼻)

擬聲話

- 三〇六 ホースコ 用心しよ (梟)
- 三〇七 のりつけほー すけほーほー (梟)
- 三〇八 てれつくほーほー (梟)
- 三〇九 ホーホケキヨ (鶯)
- 三一〇 いかるなんてなくわしや きこきこきー (斑鳩)
- 三一一 いかる豆の粕ころころ (いかる)
- 三一二 ひこきちいー (いかる)
- 三一三 いかるきこきこきー 辨當背負つて山へ行つてきこきこきー (いかる)
- 三一四 キーコー (いかる)
- 三一五 ほつちよかけたか (時鳥)
- 三一六 てつべんかけたか (時鳥)
- 三一七 佛器よかけたか (時鳥)
- 三一八 げんべいつゝじ白つゝじ (頬白)

- 三一九 ちよつべいつゝじぶたのけつ (頬白)
- 三二〇 一寸出て一分二朱ちよこまけた (頬白)
- 三二一 一筆啓仕上る (頬白)
- 三二三 てつぽつぽ 豆食つて腹痛い (山鳩)
- 三二三 佛法 (佛法僧)
- 三二四 かつころ (かつころ)
- 三二五 じういちー (じういち)
- 三二六 つーつー つんからから (四十雀)
- 三二七 ちゆくびん (小がら)
- 三二八 親死ね子死ね 鍋釜割れる (鶴鴿)
- 三二九 しつかかへしくよしのついてななついて あいたいたいた (腹切)
- 三三〇 とてこつこ一升とつてこかー (雞)

してけ

嘲 話

- 三三一 お寺の坊主に瘤出来て 膏藥貼つたらどびんになつた
- 三三二 お寺の坊さん栗焼いて あつつゝもつつゝみんな來てもんでくれ もう焼いて食はまいぞ
- 三三三 坊主ぼつからかいて日にやけた
- 三三四 坊主ぼつくり釜の蓋 釜をはぐれば鳥の糞
- 三三五 お寺の坊さん栗焼いて ちんぼのはたへ火がとんであついともし言はず いたいとも言はず もうくりくり やいて食ふまいぞ
- 三三六 お寺の坊主が座敷へ坐りなじやくじやはい十錢
- 三三七 坊主頭に山椒味噌つけて 坊主辛いかひがらいか
- 三三八 坊主ぼゝけて毛が生えた

三三九 坊さんく馬鹿坊さん お寺の屋根で晝寝して鼠に罌丸かぢられて 猫のおかげで助かつた

- 三四〇 坊主どこいく お山を越えて かさ借り
- 三四一 お寺の坊主 まる儲け
- 三四二 しようたれ坊主 糞坊主
- 三四三 負けて逃げるは 支那のちやんく坊主
- 三四四 負けてくやしや酒の粕
- 三四五 負けて逃げるは 紺屋の丁稚
- 三四六 負けて逃げるは 女の子

三七 何

何が何でもぼた餅や米だ つけたきな粉は豆の粉だ
 なんだら味噌かうじ味噌 甘いかすいかなめて見よ

嘲 話

二四八 何したよ

菜の下蕪 蕪の下土

二四九 あゝ

あんだらかけろ かけたらはづせ

二五〇 あー

あーと言ふ薬くれすか

二五一 いや

嫌ならおきやがれ 好かれちや困る お氣の毒だが外にある

二五二 うん

うんだらつぶせ 針なきや貸せる

うんとまたいでうんこひれ

うんといふ薬くれすか

二五三 えゝ

荏は高いで胡麻おくれ

二五四 おゝ

おんだらおろせ

二五五 おい

^(大井)おいは中津の二里半向ふ

大井はまだ遠い 四里半六町 おやま買つてもどれ

二五六 知らん

知らにやしんたの玉かつげ 重けりやおろして又かつげ

知らにや白髪の新六爺に聞いて来い

知らにや親町河原町 焼いて叩いて赤ちんぼ

しらにやしらこぶしつちよいちよい

しらにやしんたの玉かつげ しつたらおよしのけつねぶれ

しらにや白髪の新にきけ

三三七 はい

はい婿とつた

はいはいくお馬の後

三三六 ほて

ほていの窪へつり上れ

三三五 だまり

つんぼつり鐘叩き鐘三年叩いて金たゝけ

だまり團子に尻が三つ 三年たつても米一升

だまりつんぼに尻が三つ

ゆふべ婿様とつたのか とつたらとつたと言ひなさい

三三〇 や

やなら柳でけつはじけ

三二九 痛い

痛けり鼯鼠の糞つけるまんだいたけりやまぐそつけよ

三二八 たるい

たるけりや樽かつげ

三二七 當然

そんな事はきまりの罌丸

三二六 よいか

えかく馬の尻

三二五 はつこまこはり倒せ

二六六 女と男といつちやんちゃん そのみでこぼしちやもつたいない

二六七 女と男といつちやんちゃん いつてもいつても生臭い

二六八 男(又は女)の中に 女(又は男)が一人 豆いつて食へ食へ

二六九 男の中の豆いり いつてもく生臭い

二七〇 男と女といつちやんく 豆いりこぼいて勿体ない ねんねが出来たらどうするよ

反物一反買つてやれ

二七一 女にからかふ腰抜男

二七二 今泣いた子はどこの子 紺屋の婆の子 べつたんくつたんはつてやれ

二七三 今泣いた子は誰だ 縁の下へすつこんで 又出て笑つた

二七四 今泣いた子はどこの子 紺屋の婆の子 藁三把持つて来い 肩真赤に焼いてやる

二七五 今泣いた子は誰だ 贅川のねこの子 おれも一つないてやれ にやご〜

二七六 今泣いた子は誰だ 八婆の子

二七七 泣いて笑ふは仙氣の藥

二七八 泣きつ面に蜂がさす

二七九 怒りばちやおこつた

二八〇 おこりばちきんばち 酒屋の狐ん坊

二八一 意地悪こわる 天から下までどつてんしよ

二八二 意地悪根性のけつ曲りけつが三尺まがつてる

二八三 牛んぼたねんぼ 種の中へ糞ひつて煮ても焼いても食はれない

二八四 牛んぼたねんぼ 親のいふ事きかなんで鼻へ繩通された

二八五 芋屋の小僧芋ばか食つてお腹が太鼓お尻が喇叭ぶかどん〜

二八六 芋屋の小僧町中歩いてうでなんでとつとやかつかに叱られた

二八七 裏の島の牛蒡 細くて長くて毛だらけ

二八八 子供の喧嘩に親が出る

二八九 足折つてつまらない 遊びに出たいがなをらない

二九〇 鱈がひつくり返つてべそ見せた たにしが笑つてごうろごろ

二九一 猿々木から落ちて泣き猿

二九二 お客のないにお皿を出いて ぼん〜

二九三 人まねこまね酒屋の狐 粕くれて追出せ

二九四 内證話は氣にかゝるおらもき〜たい話したい

二九五 在郷の猫の糞

- 三九六 親に墨つけて子を泣かすな
- 三九七 ○○さんの頭にちよんちよくれが止つた それ取りや坊主
- 三九八 おん岳大根蕪大根煮ても焼いても 食はれん大根目でつた頬白
- 三九九 いゝこときいたものきいた三年先からきいといた
- 四〇〇 奈良井は茄子の子 ねえ川猫の子 平澤日の丸萬々歳 (平澤)
- 四〇一 おちさんどこだい ○○^(場所)だい 商賣何だい 炭焼だい 道理でお顔がまつ黒い
- 四〇二 あの子の頭の刷り方は 一銭すりかごますりか菜の種こぼれか十文か 二十五日は おてんじく
- 四〇三 一二三日の子四たけ五んぼ六でもない七面鳥八とばせ糞小僧とぼけんな
- 四〇四 一人二人三日の子四人目の糞かきぼ 余つたらしよつてゆけ 橋の下のどろぐそ 箸よもつてかつこめく
- 四〇五 家の下女にも困りもの 勝手ちや澤庵ぼりぼり 日向に出てはしらみとり 寢床 ちやおけつて喇叭吹く

- 四〇六 胡瓜くどて南瓜人蔘牛蒡にさつま芋
- 四〇七 飯はめんばで仕事は半端 男は立派で齒はそつば
- 四〇八 きーよ清翠丸落すな おらが拾へばやるけれど鳥が拾へばもうやらん
- 四〇九 きてん箱借りて来い
- 四一〇 かづちやかすの子にしんの子
- 四一一 でぶ／＼百貫でぶ 電車にひかれて ベつちやんこ
- 四一二 一つ左から禿げて来て 二つ不思議に禿げて来て 三つ右から禿げて来て 四つ横から禿げて来て 五ついよ／＼禿げて来て 六つむしように禿げて来て 七つ泣いても禿げて来て 八つ矢鱈にはげて来て 九つこんなになに禿げて来て 十で床屋に用はない

舌もぢり

三三 生米生麥生卵

舌もぢり

- 三四 長持の上に生米七粒七並べ
- 三五 長持の上に生米三粒たまが頭がたまが向ふのたてかべ竹をたてかけた
- 三六 長多屋の長持の上に生米七粒並べて眺めてなめた
- 三七 坊主が屏風に坊主を書いた
- 三八 坊主が病気で屏風がないからこの屏風を坊主の病気の屏風にしよう
- 三九 小山の小寺の小僧が小棚の小味噌を小なめて小鍮でこつんところづかれた
- 三〇 お寺の小僧が活動の歸りにかどの菓子屋でかち玉買つて来て固くて食へんで返して歸つた
- 三一 唄うたひが唄うたへと言ふけれど唄うたひの唄うたへる程唄うたへりやいゝけれど唄うたへりやへん
- 三二 おら隣へ唄うたひが来て唄うたへとさう言ふが唄うたひでねえで唄へんよ
- 三三 美濃の蛇池に長年蛇が居るさうちやが雌蛇ぢやか雄蛇かなんぢやかわしやわからんぢや

- 三四 中津の四ツ目川には蛇がゐるぢやげな
- 三五 (地名)あつたさうな大きな蛇が居るさうな山の奥の其のおくに知らんぢやかうそぢやか
- 三六 こゝのゐろりはぬるゐろり隣のゐろりもぬるゐろりその又隣のゐろりもぬるゐろり合はせて三ゐろりぬるゐろり
- 三七 向ふの茶釜もからかね茶釜隣の茶釜もからかね茶釜うちの茶釜もからかね茶釜三つ三ちやがまみなからかね茶釜
- 三八 わしがわしの山でわしの鐵砲でわしをうつたらわしもびつくりわしもびつくり
- 三九 こつちのまやもからまやとなりのまやもからまや三つ合はせて三からまや
- 三〇 隣の客はよく柿食ふ客だ
- 三一 行者の飲む茶は下茶か上茶か
- 三二 一きよく二きよく六きよく六
- 三三 とつきよきやつきやこゝ
- 三四 赤巻紙黄巻紙青巻紙

- 三三五 猿が逆さに櫻に三匹下つた
三三六 猿が木からおがみやがる
三三七 けさちやならけさちやけはつくけんさいもの、けんふくろけんこけんこ
三三八 横町の七曲り長い七曲り
三三九 隣の竹兵衛何故竹立てかけた竹たてかけたかかつたで竹たてかけた
三四〇 蛙びよこびよこみびよこ〜
三四一 蛙が川端かけ足でかける
三四二 お前の前髪はげ前髪
三四三 向ふの細どぶに細鱈がちよりによろり
三四四 畦鱈田鱈ちよとによろり
三四五 桶に毛が生えりや桶屋さこまる
三四六 信州信濃の新兵衛さんの尻に虱が四匹しがみついて死んでおつた
三四七 東京特許許可局

- 三四八 五郎五がつくごん屋の權助ごつてごられてごりとばされた
三四九 よしよがつくよんやのよん助よつてよられてよりとばされた

戯 語

- 三五〇 密柑さんかん酒のかん親はせつかん子はきかん
三五一 密柑さんかん酒のかん子供に羊羹やりや泣かん
三五二 密柑さんかん酒のかん おらも食ひたし錢はなし 錢箱さらけてどやされた
三五三 密柑さんかん酒のかん親はせつかん子はきかん 角力取りやはだかで風邪ひかん
田舎の姉さん氣がきかん
三四四 河原に火事やある 目くらが見つけて 啞が呼びり出す つんぼが聞いて いざりがとび出す てんぼが水を汲む
三五五 高い山へ登つて小山へ下りて目醫者へよつて はなぼう〜一本盗んで川原へ下り

て小石を拾つてあごの下でくすくす笑つた

三五六 大やぶ小やぶちか／＼ すん／＼にやぐ／＼ 肩殿眩殿手首手のひらまん十きたら
う背高醫者殿こん坊主

三五七 さうだ村の村長さんの總領息子が曹達飲んで死んださうだ 葬式饅頭でつかいさう
だ

三五八 さうだ村の村長さん 門へ出て踊れせどへ出てをどれ どんどと踊れ

三五九 ラツキヨ／＼ 生ラツキヨ／＼ むいてもむいても皮ばかり

三六〇 可愛い／＼蛙の子 たまには憎いこともある 糊屋のおばさん 糊おくれ そこ
ちよつと寒いにしめとくれ お前どこの子丸太の子

三六一 一つひよどり二つふたなし三つみ／＼づく四つよたか五ついしくない六つもんぞ七つ
ないどり八つ山鳥九つ小鳥十でとんび

三六二 川越しや川合味噌すりや御室猫の尻尾は社木（地名）

三六三 大寒小寒山から小僧がとんで来た 何と言うてとんで来た 寒いというてとんでき

た

三六四 とつちやとやばの鳥の糞 鼻くそまるめて萬金丹それをなめるはあんぼんたん

三六五 一人娘の姉妹が朝飯食つて夜逃げして川へとびこんでやけ死んだ

三六六 嫁様婿様夏おいで 夏は麥飯とろ／＼汁 とろろが好きなら又おいで

三六七 嫁の尻へ氷がはつて婿様鐵砲でぶちわつた

三六八 年の若い男の婆さ井戸へ流れてやけ死んだ

三六九 越中富山のはんごん丹鼻糞まるめて萬金丹それをのむ奴あんぼんたん

三七〇 狸の罌丸八疊敷 あぶつて叩けば千疊敷

三七一 ごさる／＼ごさるのけつは眞赤でござる

三七二 しのだの森から四足揃へて おでどこでこ／＼ すこ／＼んこん／＼

三七三 もりもつたかもん十郎 もりもつちやんべいろべろ はやはつたかはん十郎 はや
はつちやんべいろべろ やまはつたかやん十郎 やまはつちやんべいろべろ

尻とり語

三七四 子供く／＼ほうびひけ ほうび引かづも錢がない 錢なきや田堀れ 田堀りや泥つく
 泥つきや洗へ 洗へばつべたい つべたけりやあたれ あたりやあついで あついで
 やづり上れ づり上りやけつたい けついたけりやござひけ ござひきやすべる
 すべりや綿ひけ 綿ひきやちりになる ちりになりや鼯鼠の糞三文買つて来てひつ
 かける

三七五 丸い／＼丸いは團子 團子は白い 白いは兎 兎はとぶ とぶは蚤 蚤は赤い 赤
 いは酸漿 はしつき 酸漿はなる なるは尻

三七六 李鴻章の禿頭 餛飩食つて皮残す すりこぎ頭で味噌すつて 帝國萬歳大勝利

三七七 ロシヤ 野蠻國 クロバトキン 金の玉 マドロフ 舟が がつちやんこ こはれ
 た 高しやつぽ ぽひやり 陸軍の 乃木さんが 凱旋す 雀 めじろ

三八六 ぼろ／＼ほうすけ婆さの のんつのけ けえ けつの穴が三角だ だあ 達摩さん
 の宙返り 李鴻章の禿頭 まけて逃げるは支那のちやん／＼坊主 ぼつくり切られ
 て泣いてつて 帝國萬歳大勝利

註

民謡

田舎唄

二三 木曾では代唄と言つてゐる。

田草取唄

三一四 田草取及び島の草取もはいつてゐる。

白摺唄

四六―七三 扱摺唄・するす扱唄などであるが、坐つて石臼を挽く時にも唄はれるやうである。

(附) 白挽唄

七四―七八 讀書村三留野の蘭原氏が、享保文化の頃著した白挽歌の中にでてゐるものであるが、こゝにも附録として載せることにした。

絲取唄

一九〇―一九六 絲引唄と言つてゐる。

地搗唄

一九七―二三三 どうづき唄と言つてゐる。主として石場突・地固めの作業にうたはれる。ゆつとりと一音頭毎に掛聲をかけてうたはれるものであるが、途中は略して終りの掛聲のみを載せることにした。

山行唄

三三三―三三四 春になつて青物をとりに行く男女が唄ふものである。

茶山唄

三三三―三三四 茶摘唄といつてゐる。

民謡

茶師唄

三七九—二八三 茶もみ唄といはれ、蒸した茶をもむ時にうたはれるものである。

酒造唄

二八三—二七二 木曾の酒造業にも盛衰があつて、現在は福島(三軒)奈良井(一軒)葦原(一軒)上松(一軒)山口(一軒)田立(一軒)すべて八軒の酒造家を數へるのみ、木曾谷の需要さへ充し得ぬ状態にある。これらの酒造家へ冬毎に来る杜氏・頭・酛廻・糟頭・釜屋・精米・働き等は主として小谷地方又は知多半島附近の者で、小谷杜氏・知多杜氏と呼ばれてゐる。唄によつて擺入れの時間を調泄したのは前の事で、時計の出現や醸造法の改良によつて、擺入れを唄によつて決めてゆくことは稀になつたやうである。

洗場 洗場にて桶などを洗ひながら唄ふ。

山おろし唄 原料(蒸米・麴・波水)を半切桶に仕込み、荒播・本播・三番播などする時唄はれる。

酛掻き 山おろしの後二三時間毎に擺入れをして何回か酛よせをする。この酛掻きの時の唄。

早擺 播りの不十分な時は早播をする。

諸物 大桶に入れて諸味の時唄ふ。

三ころ唄 諸物の終りに三ころ唄となり、擺の入れ方も異つてくる。

留唄 酛を初・中・留と三回に仕込む。その留の時の唄である。

馬追唄

三七三—四〇四 馬子唄と言つてゐる。

木造唄

四〇五—四四六 主として音頭のみを載せたが、四三四・四三三・四三六は掛聲のみである。一音頭毎に曳手が連聲で唄へる掛聲は四二のやうなものである。四四四・四四六は木馬引唄と呼ばれてゐるものである。

座敷唄

四四七—四六六 ほめ言葉のつもりで唄ふものを載せた。婚禮・棟上・誕生祝・御宮詣り・入替等祝の時うたはれるものである。四四七は三七七に既出であるが必ず唄はれるものであるから載せることとした。高い山は福鳥町水無神社の祭禮にも御輿をかつぐものによつて必ず唄はれるものである。

嫁入唄

四六七—四七六 長持唄と言つて嫁入道中に荷をかつぐものがうたふ。

酒盛唄

四七七—五〇五 酒盛の場で唄ふもの、皆酒をすゝめるものである。座敷唄も踊唄も唄はれることが多い。

立酒唄

五〇六 嫁を連れて来て、歸りに草鞋を穿き庭に下り立つた時「さあ、草鞋酒一杯」と言つて酒を出される。その時唄ふもの。

物吉唄

五〇七 春駒と言つてゐる。豊饗を祝福する唄である。

宮入唄

五〇八—五〇九 大桑村野尻の祭禮に於て宵祭りに神輿が森の木立を離れる頃から参詣の者が唄つたと言ふ。

五〇九 本祭りに若宮の行在所より本町通りへ出る頃より参詣の者が唄つたと言ふ。

神送唄

五一〇 大桑村野尻の祭禮に於て お山入り（祭の最後）の日に唄はれたもの。

踊唄 大体同じ種類のを一括し、その本唄と思はれるものに名稱をつけることゝした。然しどの節にもあひ、判然と分け難いものが多いやうである。

子守唄

八四七—八五九 背負つたり抱いたりして子を眠らせるもの。

遊ばせ唄

八六〇—八六九 幼児に聞かせて喜ばせるもの。

手毬唄

八七〇—八九八 詞句に合はせて一人ずつくものと、二人相對して毬を受け渡ししながら唄ふものがある。

お手玉唄

九四九―九六三 お手玉のことをおだまと言つてゐる。二人乃至數人車座になつて唄をうたひながら所作をする。親玉一つと子玉偶數個を以て一組とし、失敗ある毎に次の人と交替する。又、片手又は兩手にて投げ上げてあやとりするものもある。

(附録)

童言葉

羽子突

一―九 追羽子紙風船などつく時唄はれる。數取りやおはじきの時にも唄はれるものがある。

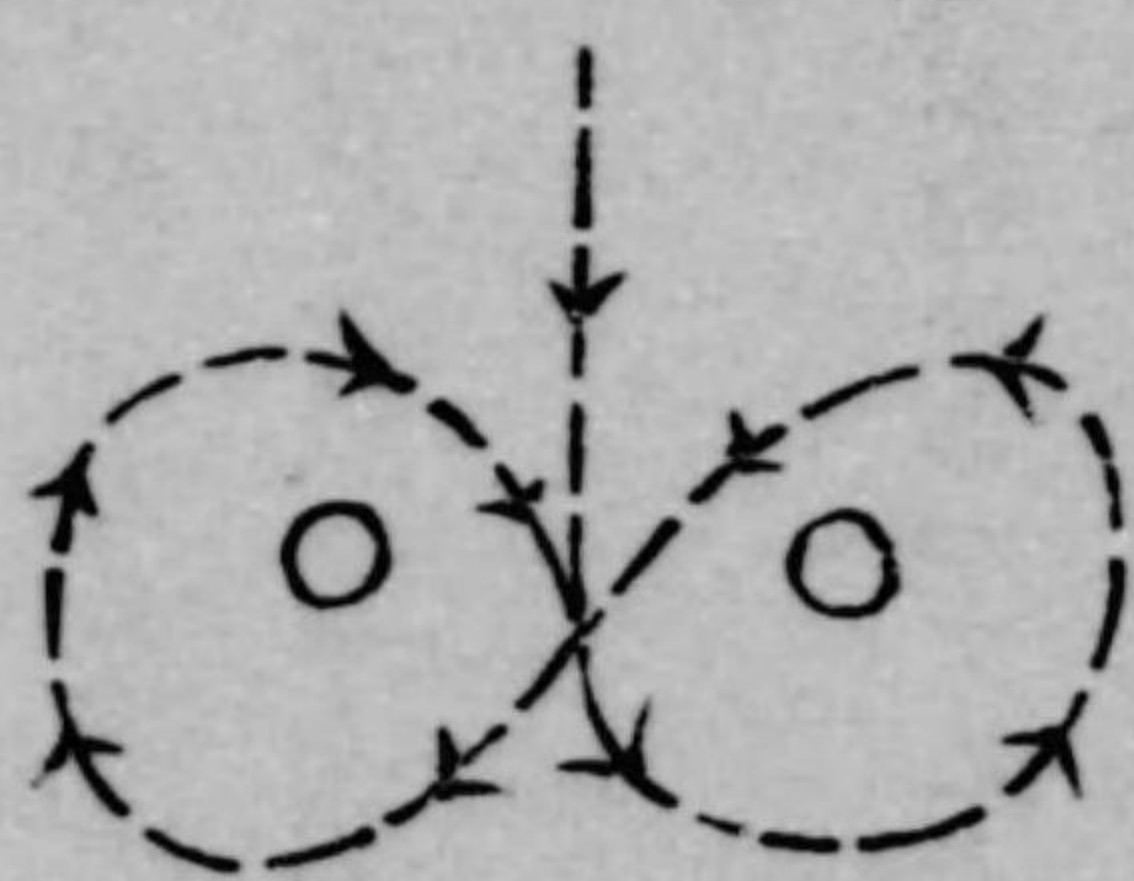
おはじき

二〇―三 おはじきは石と石の間へ指を入れてひき、石に指が觸らぬ場合ははじく。同じ石をはじく回數は定め方による。石に指が觸つた場合又は他の石にあたつた場合は交替する。又石を投げ上げて手

の中であけてとめて取る所作もあるがこの場合唄は伴はない。
いざやいざや

二 二人が手をつないで高く上げ門をつくる。他の者は一列になつてこの門をくぐる。くぐりはじめると皆この唄を唱ふ。「もろともに」の時門にしてゐた手を下し、その際そこへさしかゝつた者を、少し離れた場所へつれて行く。連れて行つた者に二つの物の名(例へば密柑と林檎・下駄と草履等)を言つて、どちらがいかき、その答によつて所屬を決定する。これを繰返して二組とし、人引きをして勝負を決める。

歩く順序



此處はこの細道

二四 二人が手をつなぎ少し高めに上げて、この唄を唱へながら振つてゐる。その他の者は二人づゝ手をつないで、振つてゐる手の下をくぐりぬけるのであるが、くぐりぬける時捕へられると、地獄と極樂の二組に分けられ、後人引きをする。

青山土手から

三三三 二人が向ひあつてこれを唱へながら、手をたゞいたりあはせたりして遊ぶ。

てこてつたいな

三四一六 「青山土手から」と同じ手遊び。

一かけ二かけ

三七 「青山土手から」と同じ手遊び。

繩 飛び

三九一四七 二人で繩の兩端を持つて廻しながら唱へる。他の者はこれを飛ぶのであるがひつかゝると持ち手になる。繩をゆすつて飛び越えるもの、兩方組合はせたもの等がある。二筋の繩を用ふるものもあるがこの場合は唄を伴はない。

ちゆうく鼠

四〇一五〇 一同一列になり指で輪をつくる。一人がこれを唱へながら自分の指で他の人の指の輪をつゝく。唄へ終つた時にあたつた人は目をかくす。他の人がその人の頭をつゝいて、どの指でつゝいたかあてさせる。あたると交替する。

つぼどのく

三二 「ちゆうく鼠」と同じ。

中の中の

三三一五六 一同手をつないで輪をつくる。一人が中へはいつて目をかくす。一同がこれを唱へながら廻る。唄の終つた時廻るのを止めて、後に居る者をあてさせる。あたつた場合は交替する。あたらぬ場

合は何回も繰返す。

かごめく

五―六〇「中の中の」と同じ。

大かん小かん

六―六五 一同一列に並ぶ。一人が反対側に居りこれを唱へながらほしい子を一人づつ連れてゆく。

七来い七来い

六六 「大かん小かん」と同じ

おこんさ

六七―六九 一同の者が輪をつくり一人を中へ入れてかくす。他方から一人が出て来てこの問答をする。問答の中途にて輪の中にかくれてゐた者が逃げ出す。これを他方から来たものが捕へる。又は大きな者のかげに小さなものがかくれ、一同と問答する。この問答の途中でかくれてゐたものが逃げ出す。

一同追つていつて捕へる。

狐遊び

七〇―七一 一同ある所へ狐になったものがやつてくる。これを唱へながら狐の後をついて歩き唱へ終つた時皆逃げる。狐に捕へられたものは狐となる。

今年の牡丹

七二 「狐遊び」と同じ。

坊さん坊さん

七三 狐遊びと同じ様に唄の終つた時坊さんが追つて行つて捕へる。

坐り鬼

七四 一同車座に坐る。鬼が中にゐる。これを唱へながら立つのであるが、立てばすぐ坐る。立つた時に鬼が捕へる。

おかごぎちく

八六 二人で手をつなぎその上へ他の人をのせてゆする。

米つき栗つき

八七―八九 二人で背中をあはせて交るく背負つて遊ぶ。

お月様

九〇―九三 只唱へて遊ぶのみである。遊ばせ唄に入れた方が適當かとも思はれる。

上り目下り目

一〇〇 目をつりあげたり下げたりして遊ぶ。

べろく神

一〇五 折り曲げた一本の棒を両手で挟んでこれを唱へながら廻す。唱へ終つた時その釣の方がむいてゐた者が尻をひつたといふ。

指輪まはし

一〇六―一〇七 車座に坐り各人左手で受け右手で渡す。鬼が中へはいり目かくしをして適當な時機に合圖をする。その時指輪を持つてゐた者が鬼となる。

押してけ押してけ

一〇九―一二三 寒い時など壁へ押しつけて遊ぶ。

一なげ二なげ

一二四 偶數本の竹を持つて、唄に合つた所作をして遊ぶ。

誓約

一三六―一四四 二人で小指をつないでこれを唱へ「ぼつとりしよ」で小指をはなす。一方が「つる」といへば、片方で「かめ」といひ誓約が出来る。

決定

一五二—一五九 唱へ終つた時あたつた者が決定される。

呼びかけ詞

一七〇・一七六 煙を見て呼ぶ。

一七九—一八四 天氣に關するもの。

一八五—一九二 鳥を見て呼ぶ。

一九三・一九三 養を見て呼ぶ。

一九五 水泳の時など耳へ水がはいると、あたゝかな小石を耳にあてゝ呼ぶ。

一九五・一九六 川遊などの時水が濁ると呼ぶ。

一九七 疣を山椒の木へうつす時。

一九八 春先の露の出るのを待つて呼ぶ。

一九九 眼へ塵埃のはいつた時。

二〇〇 何かして逃げるとき。

二〇一 冬寒い時。

二〇二 恐しい時。

二〇三・二〇四 鐵瓶や鍋を見て呼ぶ。

(附) 擬聲語

二一六 巢をとるとかう言つて鳴くと言ふ。

嘲 語

二二一—二四三 相手を嘲る時にも言ふ。

二四三—二四六 喧嘩した時など負けた方を嘲る。

二四七—二五九 人を呼んだ時の返事又は態度にいふ。

二六〇 賛成を求めて拒絶された時にいふ。

二六一・二六三 痛いとか、たるいとか言つた時にいふ。

二六六—二七〇 男の子と女の子と仲よく遊んでゐるのを擲楡ふ時にいふ。

二七一 女をいぢめた男の子にいふ。

二七二—二七六 子供が泣いた後にいふ。

二七七 泣きながら笑ふ場合。

- 二七六 泣きながら益々おこつて泣く時。
- 二七九・二八〇 怒つた時。
- 二八一・二八三 意地悪をした時に言ふ。
- 二八九 喧嘩して相手の親に叱られた時にいふ。
- 二九三 膝を出してゐる者にいふ。

卷末小記

調査委員 磯川 準 一

麥草の嶺を望んで、しばし土のいきれを忘れてゐた。藍色のかつた峯は、幾つかの前山にへだてられて、今日は遙かに遠く見える。

やつと校正を終つたので、過去を回想して、辿り来た経路の大略を記して置かうと思ふ。

郷土調査會で民謡の採集に手をつけてから、もう三年になる。一まとめは早くすましたのであるが、まだありさうだといふことや、整理に手間どつてしまつたことが、こんなにものび／＼にさせてしまつた。年中行事・言葉・傳説など、多方面に手をのばしたことも、手間どらせた一つの理由ではあらうが何よりも有力な原因は、編稿したものの低回である。この點はお力添へをいただいた方々に深くお詫びしなければならぬ。

最初調査會が民謡を採集しようとした目的は、只目に觸れた珍しい草花をつみとつて、愛玩しようとする様な好物的なものではなかつた。「近頃は歌で時間を計る必要もなくなつたために、摺入れにも流

行唄を唄ひますよ」とか、「村で横手を唄へるものは、わし一人になつてしまつた」などといふ話を聞くに至つて、ともかくも地方色と野調とを失はないうちに、採集しておかねばならぬと思つたのである。又記録では知ることの出来ない祖先幾代の生活感情にふれ、その文化のあとを尋ねたいと願つたのである。

採集については、唄の項目を示して各學校へ委嘱し、各學校では、それぞれ適當な方法の下に立案して採集してくれたのである。最も手がかりになつたものは、學校の上級生を通じての採集であつた。それによつて資料を與へられ、その方面に堪能なる故老の許へ、館かずに足を運んで聴取したものもあり田の畦に腰かけて聴いた田植唄もあつた。故老を招待して、いさゝかの酒肴を呈し、口をついて出る唄を採集したのもあり、踊の夜、深更まで立ちつくして、踊手の調子の高潮やゆるみに、亢奮や雑ばくな感じを抱きながら採集したものもあつた。

取捨選擇の方法は、郷土に發生したと思はれるものを主としたのであるが、この土地で古くから唄はれてゐると思はれるものは、すべて載録することゝした。又あきらかに他地方のものであつても、はやくからこの土地に唄はれてゐるものは、傳播のあとを見ようとしてのせたものもある。木遣唄の中の掛聲と鳥追唄の中の唱へごとは、民話の中からぬく方が適切かとも思はれるが、一應載録することゝし

た。徒に採集量を誇るわけではないが、郷土で唄はれてゐるといふことで捨てがたい思ひもし、捨てるべきもので、捨て得ずにしまつたものもある様に思ふ。そのためいさゝか雑然とした感がないでもないが他地方の民話集と比較する事によつて、その系統を明らかにしようと思ふ。

分類は柳田先生の御教へによつたのである。勞働によつて分類するにしても、その所屬が明確をかき決しかねるものが多かつたのであるが、雑のあらうとも考へられず、大膽すぎる分類をした爲に、御教へをうけるものも多からうと思ふ。

曲譜や踊りの振り等は同時に採集されるべき性質のものである、民話の生命も、大半はこゝにあると思はれるのであるが、素人には、中々容易なことではなく、限らない執着を感じながら、適當な時機にゆづることゝした。然しながら豫測できない適當な時機は、心もとない感じがする。

手毬唄の中には、意味の不明な部分を探つたものもあるが、意味は不可解であるにも拘はらず、永く記憶せられてゐた點に興味を覺えて、載録することゝした。

童言葉は、どこまでが彼等の言葉であり、どこまでが大人からの模倣であるかを、明らかにしたいと思つたのであるが、明確を缺くものが多く、そのまゝ載録することゝした。手毬唄や童言葉の、わからないものゝ中から、ある時代の人々の生活内容を窺ひ知ることが出来れば、何よりの收穫である。

民 誌

二二四

過去を顧みて、各學校主任諸君の倦む事無き御努力に對し、深甚なる感謝の意を表するものである。
昭和十一年七月

昭和十一年九月五日印刷
昭和十一年九月五日發行

長野縣西筑摩郡福島町福島小學校内
信濃教育會本會部會
著作兼 代表者 原 和 海
發行者

印刷者 長野市妻科百七十三番地
大 日 方 利 雄

印刷所 長野市南縣町六百五十七番地
信濃毎日新聞株式會社

773
142

